

群馬の万葉歌

◎万葉集卷二十・防人歌

①天平勝宝七歳乙未二月、相替り  
て筑紫に遣はさるる諸国の防人  
等の歌

遠江国	7首	／	18首	}	
相模国	3首	／	8首		
駿河国	10首	／	20首		
上総国	13首	／	19首		
常陸国	10首	／	17首		
下野国	11首	／	18首		
下総国	11首	／	22首		
信濃国	3首	／	12首		
<u>上野国</u>	<u>4首</u>	<u>／</u>	<u>12首</u>		
武蔵国	12首	／	20首		
84首				／	166首

- ②昔年防人…………… 8首
- ③昔年相替防人……… 1首

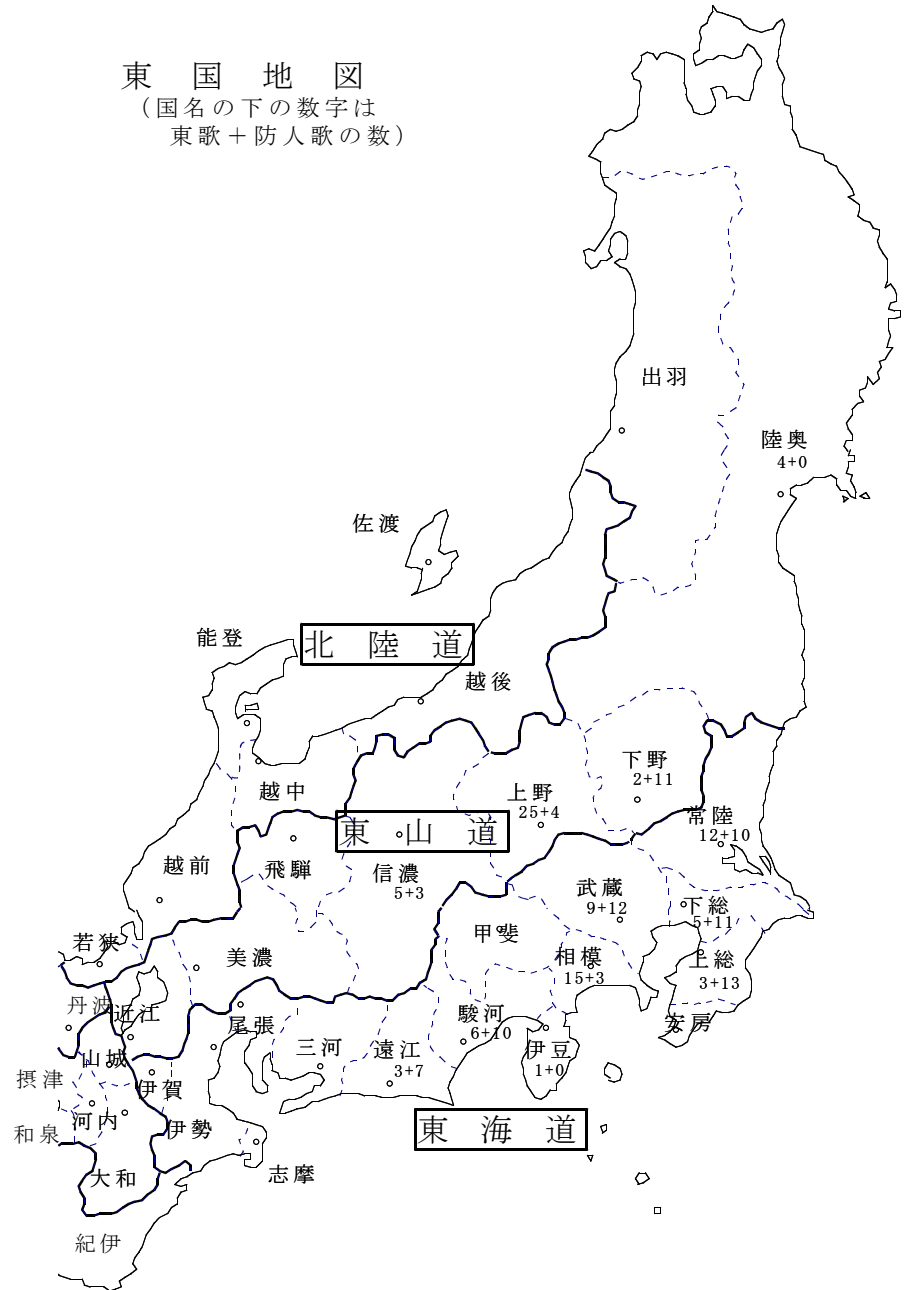
合計 93首

◎万葉集卷十四（東歌）の配列

国名判明	雑歌 5	上総 1首 下総 1首 常陸 2首 信濃 1首	} 東海道 - 東山道
	相聞歌 76	遠江 2首 駿河 5首 伊豆 1首 相模 12首 武蔵 9首 上総 2首 下総 4首 常陸 10首 信濃 4首 <u>上野 22首</u> 下野 2首 陸奥 3首	} 東海道 } 東山道
	譬喩歌 9	遠江 1首 駿河 1首 相模 3首 <u>上野 3首</u> 陸奥 1首	} 東海道 } 東山道
国名不明 140	雑歌 相聞歌 防人歌 譬喩歌 挽歌	17首 112首 5首 5首 1首	

合計 230首

東国地図  
 (国名の下の数値は  
 東歌+防人歌の数)



【碓氷】

① 日の暮に碓氷の山を越ゆる日は夫なのが袖もさやに振らしつ (三四〇二) 上野東歌

② ひな曇り碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく忘れぬかも (四四〇七) 上野防人歌

右の一首は、他田部子磐前のなり。

【丹生】

③ 真金吹く丹生の真朱の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくは (三五六〇) 未勘国東歌

《参考》

・白真砂御津の埴生の色に出でて言はなくのみそ吾が恋ふらくは (二七二五)

【多胡】

④ 吾が恋は現在もかなし草枕多胡の入野の将来もかなしも (三四〇三) 上野東歌

《参考》

・……三郡の内三百戸を郡と成し、羊に給ひて、多胡郡と成す。……

(多胡碑 七一年)

昭和三十年まで存在した入野村は、明治二十二年の町村合併の折、小串・黒熊・深沢・石神・中島・小暮・馬庭・岩井・多比良の九ヶ村が合併して成立。村名は、東歌の「多胡の入野」が黒熊附近に比定されるという説を採用して命名された。

## 【佐野】

⑤上毛野佐野の舟橋取り放し親は離くれど吾は離るがへ（三四二〇） 上野東歌

《参考》

a …… 佐野の三家と定め賜ひし健守命 ……（山上碑 六八一年）

b 上野国群馬郡下賛郷高田里の三家の子孫 ……（金井沢碑 七二六年）

c 橋は あさむづの橋。長柄の橋。 …… 佐野の舟橋。 ……（枕草子六四）

× d 駒とめて袖うち払ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮（新古今集六七一）藤原定家

× e 苦しくも降り来る雨か三輪の崎佐野の渡りに家もあらなくに（万葉集二六五）

f 駒留めて、袖うち払ふ蔭もなし、佐野のわたりの雪の夕暮れ、かやうに詠みしは大和路や、三輪が崎なる佐野のわたり。これは東路の、佐野のわたりの雪の暮れに、迷ひ疲れ給はんより、見苦しく候へど、ひと夜は泊まり給へや。（謡曲鉢木）

⑥上毛野佐野田の苗のむら苗に事は定めつ今はいかにせも（三四一八） 上野東歌

## 【伊香保】

・万葉集の時代の「伊香保」は榛名山のこと。

・「いかほ」という語の構成は「いか（厳）＋ほ（穂・秀）」と考えられる。

・「ほ（穂・秀）」は、突き出ているもの、他からぬきんでているもの。例えば、稲穂、槍の穂、波の穂などの「穂」。「炎（ほのほ）」は「火の穂」の意。山の名には

「高千穂」「穂高」など「ほ」の付くものがある。「いかほ」の「ほ」も同じ。

・「いか（厳）」は「内部の力が充実していて、その力が外形に角張って見えている状態」（『古典古語辞典』の「いかづち【雷】」の項）を表す語で、「いかし（厳し）」「いかめし（厳めし）」「いかる（怒る）」「いかづち（雷）」などの「いか」も同じ。「いかほ」の「いか（厳）」は、この山のもつどのような性格を「いか（厳）」ととらえたのであろうか。

・山の姿  
・雷の巢窟  
・火山

⑦伊香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には故はなけども子らによりてそ（三四二一）上野東歌

⑧伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり（三四二二）上野東歌

《参考》

・韓亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし（三六七〇）

⑨上毛野伊香保の嶺ろに降る雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり（三四二三）上野東歌

《参考》

・わが屋戸の君松の木に降る雪の行きには行かじ待ちにし待たむ（一〇四一）

⑩伊香保ろの八尺の井手に立つ虹の躰ろまでもさ寝をさ寝てば（三四一四）上野東歌

《参考》

a 虹 にじ○東国の小児。のじと云。（『物類称呼』巻一「天地」）

\*『物類称呼』は江戸時代中期の安永四年（一七七五）にできた方言集

b のじ 虹（『群馬県邑楽郡誌』前編附録「二、方言」）大正六年（一九一七）刊

c ノジと発音するのは注者の少年の頃にも村裡には行はれた。

（土屋文明『万葉集私注』三四一四番歌の語釈）

\*土屋文明氏は、明治二十三年（一八九〇）西群馬郡上郊村保渡田生。

### 【利根川】

⑪利根川の川瀬も知らず直渡り波にあふのす会へる君かも（三四一三）上野東歌

### 【久路保】

⑫上毛野久路保の嶺ろの葛葉がた愛しけ子らにいや離り来も（三四一二）上野東歌

平成十七年まで存在した黒保根村は、明治二十二年の町村合併の際、宿廻・水沼・八木原・上田沢・下田沢・上神梅・下神梅・塩沢の八ヶ村が合併して成立。黒保根村という村名は、東歌の「久路保の嶺ろ」が赤城山を指すとする説を採用して命名された。

### 【子持山】

⑬子持山若鷄冠木の黄葉つまで寝もと吾は思ふ汝は何どか思ふ（三四九四）未勘国東歌

【沢渡】

⑭ 左和多里の手児にい行き逢ひ赤駒が足掻きを速み言問はず来ぬ（三五四〇）未勘国東歌

【その他】

⑮ 上毛野平度の多杼里が川路にも子らは逢はなも一人のみして（三四〇五）上野東歌

⑯ 上毛野小野の多杼里が安波治にも夫なは逢はなも見る人なしに（同或本）上野東歌

⑰ 上毛野可保夜が沼のいはる蔓引かばぬれつつ吾をな絶えそね（三四一六）上野東歌

《参考》

a 入間路の大家が原のいはる蔓引かばぬる吾にな絶えそね（三三七八）武蔵東歌

b 西の方はるかに川嶋と聞えて、こゝにも甲波すくねの社を見やりたるは、これなん光明院がつかさどれるなりけり。うのとしのわざはひに、其地さへながれうせて、その社は南の方三四町ばかりひきしりぞきて作りたてたとぞ。……名に高きかほやが沼も、むかしこの境内に有けるを、近き頃となりては佛すらなくなりしうへ、また其地さへぞうせはてたる。（奈佐勝皐『山吹日記』天明六年「1865五月十三日条」）

\* 「うのとしのわざはひ」は天明三年の浅間山の大噴火によってもたらされた災害

⑱ 上毛野伊奈良の沼の大藺草外に見しよは今こそ益れ（三四一七）上野東歌

【上野国防人歌】

① 難波道を行きて来までと吾妹子が着けし紐が緒絶えにけるかも（四四〇四）

右の一首は、助丁上毛野牛甘のなり。

② わが妹子がしぬひにせよと着けし紐糸になるとも吾は解かじとよ（四四〇五）

右の一首は、朝倉益人のなり。

③ わが家るに行かも人もが草枕旅は苦しと告げ遣らまくも（四四〇六）

右の一首は、大伴部節麻呂のなり。

④ ひな曇り碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく忘らえぬかも（四四〇七）【碓氷】に既出

右の一首は、他田部子磐前のなり。

◎群馬県内の江戸時代の万葉歌碑（2基＋1）

①佐野の舟橋の碑

上毛野佐野の舟橋取り放し親は離くれど吾は離るがへ（一四・三四二〇）

文政十年（一八二七）現在の高崎市新町（あらまち）延養寺の良翁が建てたもの

②沢渡神社境内の万葉歌碑

左和多里の手児にい行き逢ひ赤駒が足掻きを速み言問はず来ぬ（一四・三五四〇）

《参考》

○（文政十一年八月十二日）君ノ尾よりもなほ谷川にそひて一里あまり出れば、伊香保より直に草津へかよふ道にいづ。板橋をわたり右にたどりて沢渡の出湯にいづ。四万より四里半とぞいふなる。こゝにもゆあみする人つどへり。伊香保より草津へのゆきかひにはかならずやどる所なれば、夜はわきてにぎはへり。薬師のみ堂にまうでゝ見れば、万葉集なる

左和多里能手児尔伊由伎安比安可故麻我

安我伎乎波夜美許等登波受伎奴

と云歌を石にゑりて立たり。こゝと定たるはたしかなる證ありてにや。

（富田永世『上毛温泉廻』文政十一年九月一日成）1828

ここに記されている歌碑がそれとすれば、この歌碑は文政十一年（一八二八）にはすでに建っていたことになる。

③前橋市紅雲町の巖島神社境内の柿本人麻呂歌碑

おくやまのいしがきぬまのみづこもりにこひやわたらむあふよしをなみ

《参考》

○西に見ゆる天台宗寿延寺は、赤城大明神の御別当所にて御祭礼の節は登山して御代泰平民安全の御祈祷あり。同村土産（ウブスナ）は柿本人麿の古墳にや五輪あり。後に石に刻して人麿の古歌あり。

奥山の石垣沼の水こもりに恋や渡らんあふよしをなみ

（奈良光龍『赤城詣』天保十二年十二月成）1841

ここに記されている歌碑がそれとすれば、この歌碑は天保十二年（一八四一）にはすでに建っていたことになる。ただし、この歌碑は万葉歌碑ではない。

\*おく山のいはかきぬまのみづこもりにこひや渡らんあふよしをなみ（拾遺集六六一）

人まろ

\*青山の石垣沼の水隠りに恋ひや渡らむ逢ふ縁をなみ（一一・二七〇七）作者不明